

校長室から

第14号

二宮金次郎の像について ~その6~

本校の金次郎像はどうやって時代の荒波を乗り越え生き延びてきたのでしょうか。

昨年、5月の連休が明け、雪が溶けて金次郎像がその全体を現すようになったところ、像について調べていきました。まず台座の部分についてです。正面の碑文（石碑等に彫りつけた文章）は凸字（浮き彫りになった字）縦書きで大きく「忠孝」（君主に対する忠義と親に対する孝行を結合して説かれた道德思想）、その左下にこちらも凸字縦書きで小さく「陸軍中将〇〇〇〇〇」と書かれてあります。〇の5文字をどうしても読むことができません。このことが引っかかっていて、なかなか本稿を書き始められませんでした。

12月上旬、雪が積もる前にといい像の周りを丁寧に調べましたがどうしても「陸軍中将〇〇〇〇〇」の5文字を読むことができません。このような場合、拓本（墨などを使った伝統的な器物の複製の方法）をとることは知っていましたが筆者には経験がありません。

寄り道途中の寄り道です。その時ふと思い出しました。西興部神社の境内で似たような碑文を見たことを。すぐに神社に向かいました。ありました。忠魂碑です。明治政府の成立以降、日清戦争や日露戦争での戦死者の供養のために自治体が建立した碑です。地元と縁がある将官（位の高い軍人）に依頼して碑文を書いてもらうことが多く、終戦後のGHQ指示で、かなりのものが撤去されました。こちらの碑文も正面の凹字（くぼんで彫られた字）縦書きの「忠魂碑」しか読むことができません。「忠魂碑」の左下の小さな字の下に雪が少し積もっていたのを手で払ったときでした。偶然に、くぼみに雪が入り、字を読むことができたの



神社境内にある忠魂碑



世紀の大発見？

です。世紀の大発見をした筆者は舞い上がり夢中で雪を碑文にすり込んだのです。そして「陸軍中将渡邊錠太郎書」とはっきり読むことができました。また、正面下の凹字横書きの文字も同じ方法で読むことができました。こちらは「念紀典大御」（右から読んで「ごたいてんきねん」）です。御大典とは皇位を継承したことを内外に示す即位の礼と大嘗祭の一連の儀式のことです。

西興部神社の境内にある忠魂碑は、1928年（昭和3年）11月10日に行われた昭和天皇の御大典を記念して建立されたもので、碑文は、当時旭川市にあった大日本帝国陸軍第七師団の師団長、渡邊錠太郎（わたなべじょうたろう）中将の書であることがわかりました。